

臨床心理系大学院修了生の実態把握に関する予備的検討 —インターネット調査を活用して—

福岡大学
吉岡久美子

要約

本研究では、本学大学院（臨床系）修了生を対象に、インターネット調査により修了後の実態を把握し、修了生の意見を聴取することで、よりよい臨床心理センターのあり方について検討することを目的とした。方法は、臨床心理センター相談員登録簿にメールアドレスの登録がある123名のうち、送信可能であった79名を対象に実施した。回収率は、77.2%であった。主な結果として、（1）回答者のうち8割弱が臨床心理士の資格を取得していた、（2）臨床心理センターでの事例の提供について、8割以上が可能または機会があれば可能と回答した、（3）相談員時代役に立ったこととして、1）「実習を通して学んだ『臨床心理学の基本的な技術』」、2）「講義（カンファレンス含む）を通して学んだ『臨床心理学的な視点（支援）の基本』」、3）大学院で得られた「ネットワーク」、4）「自主勉強会」・「研究会」があげられた。（4）臨床心理センターへの期待・希望については、1）「講座や研修会（勉強会）・ワークショップの開催」、2）「スーパーバイザー制度」、3）「OBカンファレンスの実施」、4）「縦のつながりがもっと増える機会」があげられた。これらの結果をもとに、今後のことについて整理した。

I はじめに

日本臨床心理士資格認定協会の臨床心理士報（2011）によると指定大学院・専門職大学院臨床心理学専攻の第一種指定大学院は144校にのぼる。第一種指定大学院には、有料の心理教育相談室（呼称は、「心理臨床センター」「臨床心理センター」「心理相談室」「カウンセリングセンター」など様々である）を設置することが求められている。

こうした心理教育相談室の設置目的は、（1）臨床心理学の研究、（2）大学院生の心理臨床の研修、（3）地域社会へのサービス、である。これらは相互に関連しながら展開される。本学大学院にも、学内実習施設として、臨床心理センターが設置されている。パンフレットには「どなたでも利用できるこころの相談室」と明記され、有料で相談業務を行っている。

ところで、本学大学院にはその特色の一つとして、「高度職業人養成のための大学院」が謳われており、これまで120名を優に越える修了生を輩出してきた。設立から10年以上が経過し、また臨床心理学に対するニーズの広がりを考えると、修了生の実態やニーズを把握することは、よりよい臨床心理センターのあり方を考える上で意義があるのではないかと考える。

そこで本研究では、修了生を対象に、修了後の実態を把握し修了生の意見を聴取することで、よりよ

い臨床心理センターのあり方について予備的に検討することを目的とする。

II 倫理的配慮

調査実施前に、大学院担当者会議において、質問項目や調査方法について検討していただき、研究遂行の許可を得た。

III 対象者

本学臨床心理センター相談員登録（2003年度～2012年度）の情報をもとに、相談員登録簿にメールアドレスの登録があった123名を対象にした。そのうち、メール配信が可能であった79名を対象に、インターネット調査を実施した。回収率は、77.2%であった。

IV 方法

インターネットを活用し、調査者のアドレスから、修了生それぞれに配信した。

V 調査期間

2013年5月13日（月）～5月31日（金）

VI 調査内容

職種、雇用形態、臨床心理士資格の取得状況、臨

床心理士経験年数、臨床心理センター、カンファレンスでの体験報告や事例提供協力の可能性、臨床心理センター所属相談員へのスーパービジョンの可能性、臨床心理センター相談員時代に学んだことで、現在役に立っていると思うこと、臨床心理センターへの期待・要望（講座の開催など）、今後連絡をとることへの許諾、について尋ねた。

VII 結 果

配信できた79名中61名から回答があった（回収率、77.2%）。なお、本調査に関してこちらへ届いたクレームは0件であった。主な結果は次のとおりである。

1. 回答者の属性

（1）性別

男性約2割、女性約8割であった。

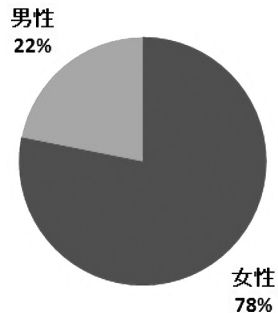


図1 性別

（2）年代

30代が最も多く、20代、50代と続いた。

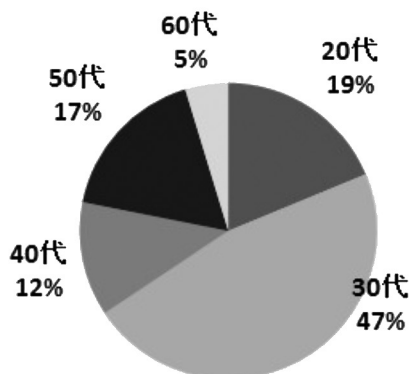


図2 年代別

（3）現在の雇用形態

常勤が約6割であった。もっともこの数値については、心理職としての常勤という意味ではないので注意が必要である。

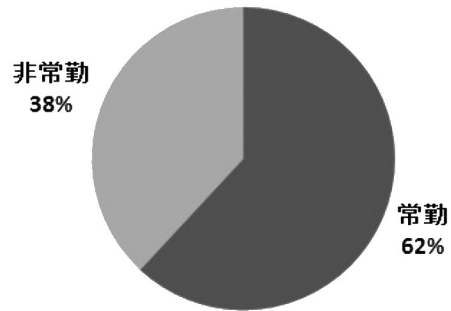


図3 現在の雇用形態

（4）臨床心理士資格の取得状況

回答者の8割弱が、臨床心理士の資格を取得していた。2割強は未取得であった。

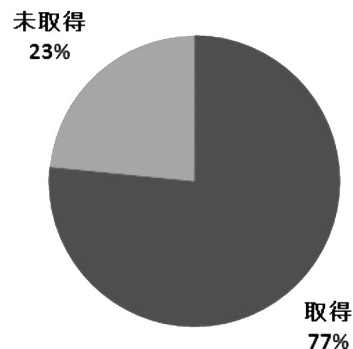


図4 臨床心理士資格の取得状況

（5）臨床心理士としての経験年数

1年以下が最も高く、2～4年、5～9年、10年以上と続いた。今回の回答者の中では、資格取得間もない人の割合が最も高かった。

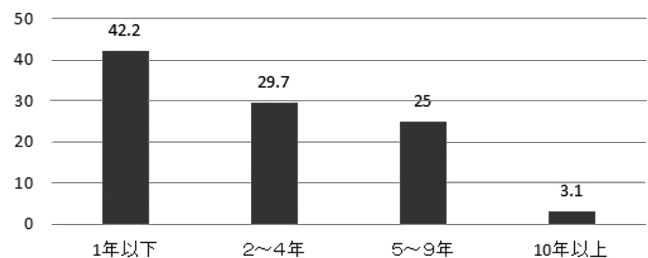


図5 臨床心理士としての経験年数 (%)

（6）臨床心理センターにおける事例提供の可能性

8割以上が、可能あるいは機会があれば可能であると回答した。

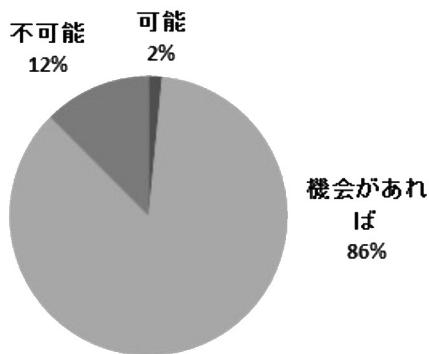


図6 事例提供の可能性

(7) スーパービジョン担当の可能性

可能・機会があれば、不可能、それぞれ約半数であった。

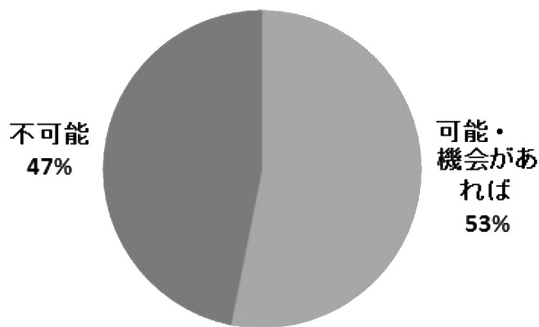


図7 スーパービジョン担当の可能性

2. 相談員時代に学んだことで、現在役に立っていると思うこと

ここでは、相談員時代に学んだことが、現在どのような点で役に立っているかについて、自由記述で尋ねた。結果、以下大きく4つのカテゴリーに分けられた。

第一は、「実習を通して学んだ、『臨床心理学の基本的な技術』」であった。なおここで使われている実習とは、臨床心理センターでの陪席、ケースの担当、曜日チーム活動、適応支援教室「ゆとりあ」での活動、病院や作業所（アットホーム）等での実習などである。こうした実習先で、「来談者との関わり方（陪席、ケース担当）」・「面接に対する姿勢」・「面接の進め方」・「インテークの実際」・「電話受付からケース担当までの流れ」・「心理検査の依頼からフィードバックまでの流れ」・『ゆとりあ』で指導員として、支援計画をたてたり、グループアプローチを行ったり、連携したこと」・「他職種・他機関との連携」・「記録の取り方」・「心理専門家としての留意点」があげられた。また、集中講義での体験型授

業の効用をあげた回答もみられた。更に、こうした実習体験を独りよがりのものにならないために、臨床心理士有資格者のスーパービジョンを受けたことが大きな支えになっているというコメントもみられた。これらをまとめると、＜実体験を通して学んだ基本的なこと＞が現在役に立っていると思われた。

第二は、「講義（カンファレンス含む）を通して学んだ、『臨床心理学的な視点（支援）の基本』」であった。具体的には、「講義・演習での話」・「カンファレンスで発表」・「フロアからのコメント」などでの考え方や視点が役に立ったという回答があげられた。また、本学大学院は、医療、看護、教育、福祉領域などの専門家で、更に臨床心理士資格を目指す社会人も多く、これらの方々からは現在自身もっている専門的知識と、臨床心理学の知見の類似点、相違点の学びが新鮮なようであった。更に、「相談員時代は、基本をしっかり学ぶこと。その後多くは現場で学ぶ」・「臨床の現場にあらためて出て、『研究』という視点を持つことが出来た」といったコメントは、経験年数の長い方から寄せられた。

第三は、大学院で得られた「多様なネットワーク」であった。本学大学院は社会人が多く、その職種も幅広く、多様な学問的背景をもつ方が在籍している。現場での臨床経験が豊かでそれに臨床心理士の資格取得を目指す方、修士の学位の取得を目指す方、現在の職業にプラスして臨床心理学を学び臨床心理士資格を取りたい方など様々である。相談員時代に、「様々な領域の専門家とともに臨床について学べてネットワークが広がった」・「自分の専門性とは違う専門性についても学べたことは、とてもいい勉強になった」・「大学院で得られたネットワークが現在役に立っている」というコメントがみられた。

第四は、「自主勉強会」・「研究会」であった。「同期の中で話し合いながら、テーマを決めて勉強会を行ったことが臨床心理士試験対策だけではなく、資格取得後も実際の臨床場面で役に立っている」や「大学院教員が開催している『研究会』への参加が、現在も大変有益である」との回答がみられた。

その他、相談員時代を振り返り、当時の相談室の雰囲気よさをあげる方や、自らもっと積極的にもって学んでおけばよかったと回答される方もおられた。

3. 臨床心理センターへの期待・希望について

ここでは、今後の臨床心理センターへの期待・希望について自由記述で尋ねた。結果、大きく4つのカテゴリーに分けられた。

第一は、「講座や研修会（勉強会）」「ワークショップ

ブの開催」であった。内容としては、「心理検査に特化したもの」・「本学教員の専門領域に関するもの」・「臨床経験年数の節目での実施」・「臨床心理士資格更新ポイントになるような研修会の実施」などがあげられた。また、こうした研修会等の情報を継続して得たいという回答もみられた。

第二は、「スーパーバイザー制度」であった。大学院生や修了生が、個人的に契約して定期的にスーパービジョン（外部）を受けられるような体制づくりへの希望であった。

第三は、「OBカンファレンスの実施」についてであった。自己研鑽の必要性を感じての希望であった。

第四は、「縦のつながりがもっと増える機会」であった。「狭い業界で、一人職場であるため、同じ悩みをもつ人と共有できれば」といった内容があげられた。

その他、臨床心理士養成教育の在り方（臨床心理学だけではなく、近接領域学問についても、もっと学ぶべきではないか）や相談員の在り方（制度をもっと厳しくするべきではないか）といった臨床心理士養成教育や制度のあり方についての率直な意見もみられた。

VIII まとめと課題

ここでは、本調査で得られた主な結果についてまとめ、課題について簡単なコメントを加える。

（1）本調査の回答率は77.2%であり、回答者の調査協力意識の高さが伺えた。一方で、メールが配信できなかったケースも見られたことから、今回の結果は、修了生の6割程度の配信の中で得られた結果と考える必要がある。またメールが配信できないケースがあったことから、大学院修了後のメールアドレスの管理についても、今後検討する必要があると考えた。もっとも、このことは個人情報保護との関連ですすめていく必要がある。なお本調査では、質問の最後に、今後メールで連絡を取ることにの承諾について尋ねたが、100%の方が承諾であった。

（2）回答者のうち8割弱程度が臨床心理士の資格を取得していた。もっともこの数字には2013年度合格者は含まれていない。一方未取得者も一群おり、未取得者の状況についても、今後把握する必要があると考える。

（3）臨床心理センターでの事例の提供について、8割以上が可能または機会があれば可能と回答した。OB/OGに事例を出していただくことはOB/OG

のフォローアップにもなるし、現役相談員の手本にもなると考える。諸々の都合があれば、是非積極的に出していきたいと考える。

（4）相談員時代を振り返り役に立ったこととして、1）「実習を通して学んだ『臨床心理学の基本的な技術の習得』」、2）「講義（カンファレンス含む）を通して学んだ『臨床心理学的な視点（支援方法）の基本』」、3）本大学院で得られた「ネットワーク」、4）「自主勉強会」「研究会」があげられた。様々な実習体験を認知的学習とつなげることは大切なことであると考え。また、対人援助職を目指すものに必要なことの1つとして、筆者は「周囲に何をしてもらうか」ではなく、「自分に何が出来るかを考え、動くこと」だと考える。そうした意味で「自主勉強会」を自ら企画したり、「研究会」に主体的に参加することは、専門家として育っていくプロセスにおいて、好ましい風土が形成されているのではないかと考える。

（5）臨床心理センターへの期待・希望については、1）「講座や研修会（勉強会）、ワークショップの開催」、2）「スーパーバイザー制度」、3）「OBカンファレンスの実施」、4）「縦のつながりがもっと増える機会」があげられた。これらについては、今後の検討課題として受けとめた。

以上、回答いただいた内容は全て貴重なものであり真摯に受けとめたい。こうした結果を踏まえ、これまで以上に臨床心理センターをよりよいものにしていくことが必要だと考える。

文献

財団法人臨床心理士資格認定協会（2011）「指定大学院・専門職大学院臨床心理学専攻（コース）一覧、臨床心理士報、22（2）：41、54-58.
福岡大学大学院人文科学研究科 教育・臨床心理専攻ホームページ＜<http://wwwcp.hum.fukuoka-u.ac.jp/gaiyou.html>＞（2013年11月26日）

謝 辞

本調査にご協力いただきました皆様に厚くお礼申しあげます。皆様から頂きました回答、どれも貴重なものばかりでした。心より感謝申し上げます。